

Title	茶人守屋教授
Sub Title	The profile of professor Moriya as an expert in the tea ceremony
Author	小田, 栄一(Oda, Eiichi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1968
Jtitle	哲學 No.53 (1968. 9) ,p.365- 367
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	守屋謙二先生古稀記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000053-0371

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

茶 人 守 屋 教 授

小 田 栄 一

稀世の人格者と敬う守屋先生が古稀を迎えられる由、心よりお慶び申し上げます。在塾4年間に美学美術史学科に籍を置いた小生にとって先生は修学上の全面的な善知識であった事は云う迄もありませんが、それ以上に人間的に先生に教えられる処が多かった所以は塾茶道部を通じて格別の薫陶を給った事に依るものです。そもそも慶応に茶道部が出来たのは昭和9年の事で歴史も可成古いわけですが、学徒出陣で途絶した部が戦後逸早く復活し、守屋先生を会長に迎えて、始め動乱期から復興期、更に安定期に入り、今日の大世帯の隆盛を見るに到ったのであります。実にその陰には守屋先生の高邁な人格に依る処が大であったと云わねばなりません。そこで小生は先生の学問的業績の顕賞は他の諸高におまかせし茶人守屋教授を浮彫にして御祝詞に代えたいと思った次第です。

元来茶人と云う言葉にも色々な意味があります。一つはお茶を本業とする人、例えばお茶の宗匠やお茶の歴史、理論等を専門的に研究している人、もう一つはお茶を趣味として自らの人間形成の上に何かの形でこれを生かしている人で、何れにしても唯単にお茶を稽古していると云うだけでは必して茶人とは呼ばれないのです。そして中には前者に類する人でも真の茶人と呼ぶに適應しくない人も見られるのであります。即ち茶人と云うのはお茶のある人、このお茶があると云うのは、その人の生活態度の内に常にお茶の本質とも云う可きわび、さびの精神的な内容を持続し得る人でなければなりません。従って、それは何もお茶の歴史や点前の種類と手順に精通している事を求められるのではなく、寧ろその人の第一人称的な行

茶人守屋教授

動と思索の中に知られると云う事です。話がまわりくどくなりましたが、この意味に於いても守屋教授のお茶人としての価値は誠に高く評価されねばなりません。勿論先生は日本の茶道史についても非常に御造詣深く、又茶儀作法を軽んじられるわけでは決してありませんが、それよりもお茶の持つ崇高な理念をすべて体得し、発散されていたことに於いて卓絶していられたといわねばなりません。

先生は常に会員にもお茶の和やかさ、美しさ、楽しさを知らしめられ、自らのお茶人として存在位置を十二分に活用されていた様です。自分で茶会を計画されたり、茶論を発表されたりする事は殆んどありませんでしたが、常に周囲にこれを生ませる無形の力を持っていらした事が其存在を益々高めている事の様に思われます。昨年部長の役をその愛弟子である八代氏に譲られたが、この二十数年間につちかわれた会風は永久に同会の繁栄を約束するものであらうと信ずる次第です。

先生はよくお茶は茶の湯と呼ぶべきで茶道と云う云い方はあまり迎合されませんでした。その意図される処は恐らくお茶が単に精神修道の技芸であるとするよりはもっと内容の豊かな日常生活を背景とした真善美の表現であると考えられたからで、この主張は曾て大正名器鑑を編された高橋箒庵先生の茶論と相通ずるものが見られます。而も美学論で世界的な業績を残してられる先生にとってはお茶の持つ美学的内容が非常によく理解され、これを強調されたかったのではないかと思われます。

幼より漢学の素養を身につけられ、而も筆才にも恵まれた先生はその知識と天分をもとに素晴らしい書や画を描かれている事は衆知の如くであります。その何れを拝見してもありありと人間守屋教授の人格と教養の高さが表出し、ほのぼのとした温みを感じられます。これこそ茶人守屋教授そのものであり、曾て小生もその一軸を給って常にこれを床に戴いて拝茶の銘としている次第です。

今ここに小生の今日の茶道観を形成せしめられた人々を振り返ると、先づ

今は故人となられた遠州流宗家先代の小堀宗明師、同じく故人となられたが塾の大先輩で実業界の大御所でもあった小林逸翁、又大徳寺芳春院の住職であられた玉井香山師、そしてもう一人がこの守屋先生であると云わねばなりません。先生の旧居登戸のお宅へ出かけたり、日吉のお住いは勿論の事、小生の東京寓青山の茶席へも度々御尊来を賜り、殊に在学中はお茶会のプランやら御道具の審美選択などに常々御指導を戴き、自然のうちに先生の茶道観が体得されていったのではないかと考えております。小生の忘れ得ぬ茶会として昭和28年度の卒業記念茶会がありますが、この時は東京美術倶楽部の1階全席を拝借し、新旧両様の茶席を設け、殊に新席の方には床にルオーの油絵の大作を掲げ朝鮮唐津手桶の水指に洋花を挿し、点前は諸先輩から仰いだ寄付で出来た立礼セット一式を用いて、これに附属の風炉・釜・水指は兎も角として茶碗はピカソ工房の筒形、茶器はギリシヤ製戦士紋小壺と何れも小林逸翁の渡欧土産を用い、随分と思いついた取合せを試みましたが、この時も一番喜んで頂いたのが守屋教授であった事を思い出します。その後も次々と茶道会の代表が変り、色々な行事やら研究を重ねて参りましたが、その都度夫々の個性を生した適切なアドバイスをされて来たわけで、その功蹟は尋常なものではありません。昨秋三田山上万来舎に於て先生の部長隠退謝恩茶会が催されたが、馳せ参じた教え子から次々と讃辞を送られた先生の満足げな御様子に小生とても感に堪えぬ思いが致しました。どうか今後とも益々御健在であられて美術界に、はた又茶道界に貢献を重ねらるる事を祈ってやみません。 (茶道研究家)